

翻訳・フロイス『日本史』3部5～6章

服部, 英雄
九州大学大学院比較社会文化研究院社会情報部門歴史資料情報講座

曾田, 菜穂美
九州大学大学院比較社会文化研究院

<https://doi.org/10.15017/1477911>

出版情報：地球社会統合科学. 21 (1/2), pp.93-100, 2014-12-25. 九州大学大学院地球社会統合科学府
バージョン：
権利関係：

翻訳

翻訳・フロイス『日本史』3部5～6章

服部 英雄^{解説}・曾田菜穂美^{訳・訳注}

前号に引き続き、ルイス・フロイス『日本史』¹ 3部5～6章の翻訳を行う。『日本史』は松田毅一・川崎桃太の著名なる中央公論版の翻訳がある。しかし多くの人に読まれる古典的な重要文献に、翻訳が一種しかないのは、歴史史料のあり方として好ましくはない。また松田川崎訳では使用されなかった別の写本もあるとされる。

今回の翻訳対象は、5章が上記訳の第8巻74章、6章が第11巻72章に相当する。写本は松田川崎訳に同じものであるが、従来の訳と異なる点がある。まず主なちがいを紹介する。文法・ネイティブによる解釈も踏まえた翻訳解説は訳注をみていただきたい。

5章

白杵城火事の記述にて、上記訳は「鳥たちによって火が(城)内に投げこまれる」としていて、意味が通じない。曾田訳は「(大方の予想に反し) 火はそこまで飛んで燃え広がり」としている。

つづいて奴隷商人の記述があるが、松田川崎訳では「時に四十名(もの) 売り手が集まる(有様で)」、かれらは豊後の婦人や男女の子供を「貧困から免れようと」(島原・三会で転売を試み) 二束三文にて売却した、と訳している。奴隷主が40人も集まってきたとされている。曾田訳では「三会や島原ではそうして40人も一緒に売られており、厄介払いのため、女子どもには二束三文の値がついている。」としている。売られた者が40人であり、奴隷を売ろうとする人は、40人もは、いなかったようだ(動詞が複数形となっているからひとりではない)。奴隷を買った肥後の人々は、自身も飢饉にあって、ただ同然で手放した。島原・三会でなら、外国(アジア)に売ることができた。

この記述は著名なもので、藤木久志『雑兵たちの戦場』(1995年朝日新聞社・35頁)でも、松田・川崎訳がそのまま引用されている。しかし奴隷商人の実態が、やや浮かびにくい。

6章

松田川崎訳には翻訳漏れの箇所がある(軍勢はすぐに土地の土豪を4・5人殺し、庶民には昨年分の年貢を支払うよう命じた)。

またドン・ジョアン・天草殿が直接秀吉のもとに積明に赴くよう求められた、とあるが、曾田訳では積明することを求められた、となっている。この点は、翻訳上は両様の解釈が成り立つとのことだが、松田川崎訳のように、「之を体よく断った。」とまではいえないようで、天草殿は、何らかの手段を画策しながら、ひたすらに許しを請うた。この段階では危機を脱しておらず、以下の文に続いていく。

高来のキリスト教会の消失について、松田川崎訳は「それはきわめて重大なことで十分に根拠のあることであった」とする。教会の消失について、フロイスが、根拠があると判断するとは考えにくい。曾田訳は「高来のキリシタンコミュニティは人数も多く安定していた」とする。

また修練院に関して、松田川崎訳では、有家にあって、そこに大勢の貴人が住んでいたように訳されているが、多くの貴人がいたのはやはり有馬であって、有家ではない。有家は須川であろう。有家と有馬は、原文(曾田訳でも)1レグア(松田川崎訳では1里で、両訳は同じ)であるが、有馬が日野江城なら有家から3キロ、原城なら4キロとなる。

(以上の執筆は服部)

第5章

今年(1588年)豊後で起こった出来事について

豊後では酷い状況が続いている。あちらから来る者が口を揃えて言うには、住民の境遇は3つに区分されるといふ。1つは捕虜として薩摩に連れ去られた者、2つは戦や病で息絶えた者、3つは飢え死にかけている者である。このようにかの地ではもはや人間とは思われないものが歩きまわり、からだは変色し皮膚から浮き出た骨が数えられるほどである。目は落ち窪み死と悲しみの恐怖

¹ P. Luís Fróis, *Historia de Japam*, edição anotada por José Wicki, S.J., Vol.5, 1984

をたたえている。からだは凄惨なシミに覆われ、多くの場合死んでも埋められず、カラスやオオカミに目や内臓を食い散らかされるといふ有様だ。また食いつなぐ手段がないため互いに辻強盗を働いており、加えて流行り病まで一向に収束しない。

このような中デウスの裁きがさらに鮮明になる事件があった。昨年臼杵の町は火攻めにあい、城¹のみ残して焼き尽くされたが、新国主²は直ちに再建にとりかかった。そして要請に応じて有力者も庶民も、力に見合った奉仕をおこなった結果、(聞くとおとよによれば)以前に外観も内実も劣らない町並みが再建された。だがフランシスコの後継者にあたるこの新国主は、父親に比べ熱意・信仰・献身・愛・真実の全てにおいてはるかに劣っていたため、また救いに至る道から遠く隔たった道を歩んでいたために、われわれの主デウスは彼を辱めることで理解に至らしめようのご配慮から、さらなる苦難をお与えになった³。しかし彼は悪弊に染まっていたのでこのような理解に到達することはなかったのである。

あちらの司祭からの書簡によると、今年の1月正午近く町の主要な街道から火が出た。火元は貧しい男の家で、そこからすぐさま燃え広がり、強風にも加勢され通りのほぼ全てを焼き尽くした。その後中国人商人が住む通りにも燃え広がり、さらに方向を変えて生前イザベルが熱心に信仰した神社(祇園神社)⁴のある一帯にも達して、そこにあった家々を焼きつくした。[丹生島]城はそこから遠く隔たった高台にあり海に囲まれていた⁵が、(大方の予想に反し)火はそこまで飛んで燃え広がり【訳注1】、瞬く間に城郭内の全てを燃やし、フランシスコがまだ異教徒だった時分に作らせた黄金の部屋部屋まで灰燼に帰した。火勢は凄まじく、ヨシムネの正室⁶は着の身着のままでやっとなつて逃げられるという有様だった。消失を逃れたのは国主の地下倉庫一つのみである。こうしてありとあらゆるものが焼きつくされたが、国主は戦地にあり消火を助けられる者はごくわずかで、そのことが被害をさらに大きくした。その後も数回火が出たがこれは強奪を目的とした放火だったとの噂である。

薩摩の連中は捕虜の一部を売りとばそうと肥後まで

行った。だが住民は凶作で困窮しており、自分たちが食べる分にも事欠く中、買った人間にまで食べさせる余裕はなかった。そこで彼らは買い取った捕虜を羊か牛のごとく高来まで売りに行った。三会や島原ではそうして40人も一緒に売られており【訳注2】、厄介払いのため女子どもには二束三文の値がつけられている。そのようにして売られた者が多数いたのである。

デウスに仕える者の善良さや美德について述べるのが、一向に主を辱めることにならないように(なぜなら彼らを称えることは、万物の創造主たる主の栄光を高める結果となるから)、悪人の傲慢さ・忘恩や悪行について述べることも、また同様に主を貶めることにはならないだろう【訳注3】。とくに不正が明白で王国や近隣一帯に知れ渡っており、また一時の感情ではなく出来事の真実にもとづいて述べられた場合には。そしてその叙述の目的が主の栄光と知恵を示すことで不信心者をとり乱させ、さらによきキリシタンに主を恐れ賛美することを働きかける場合には。また他方で悪人の不正を暴くことが、選ばれしよき者らの徳行を貶め汚すことにもならないだろう。それどころか罪人の深い闇の中で、彼らのよき模範はより輝きと美しさを増すであろう。もちろんだからといって罪深い人間が生きている限り失ってはならない希望—デウスの御憐れみにより改心し救いが得られるという希望—を捨ててもよいということにはならない。これから述べることはひとえに、一たびデウスの恩寵を失った人間がどれほど不運で不幸な状態に立ち至るか、またどれだけかつては尊び歩んだ徳の道から隔たってしまうかを理解せしめようとしてのことなのである。

[先の]国主フランシスコの息子、王子ヨシムネは父親が改宗し洗礼を受けた時にはまだ青年だった。にも関わらず救いについて大変よく理解していたので、領民は驚き彼を称賛していた。とりわけデウスについて話すのが好み、時に夜を徹して司祭や修道士と語らうことがあった。また国内から偶像崇拝を除き、家士の者の改宗に熱心に取り組むさまは、まるで福音宣教に従う使徒のようだった。そのようにしてある時は自らの疑問を解消し、ある時はデウスについて部下に説き聞かせたのである。

¹ < Wicki 注 1 > 城は丹生島の高い岩地に建てられていた。今日でも城に続く旧道と石垣が(それらの石を寄贈した大名の印とともに)残っている。また高みには神社も残っている。この不幸な戦についてフロイスは本書第4巻39～43章で記した。

² < Wicki 注 2 > 大友義統(ドン・コンスタンティーノ)。以下「豊後の嫡子」またヨシムネ。

³ < Wicki 注 3 > Cf. イザヤ書28,19

⁴ < Wicki 注 4 > 祇園

⁵ < Wicki 注 5 > 当時島であったが今日では内陸となっている。多くの海上の地(あるいはそれ以外の地)が4世紀の間に地理的属性を変化させた。古い海岸線が今日では人が住む土地となっていたり(鹿児島・長崎・大分・堺・安土等)、地震によって壊滅したり(島原)した。

⁶ < Wicki 注 6 > ジュスタ(cf. 第4巻45章)

これらの営みに夢中になるあまり、政務や領国経営がおろそかになることさえあった。だがこれらすべては、彼の本性とは相いれないふるまいであったため、彼の中の改心していない腐った部分が信仰の固持を妨げた。そして生来のことだが一貫性がなく、(日本ではよくあることだが)酒量を守ることができず、肉の欲求に屈し、魔術や偶像崇拜に翻弄され、息子の信仰や領民の改宗を妨げようとする母(教会の汚らわしい敵イザベル)の言いなりになる一方で、従順であってしかるべき父親フランシスコには逆らった。あれほど恩義のある父親にたいして、無慈悲で道義に反する行動をとったため、よき父親は弱りはて寿命を縮めていた。これらのことは父親の目にも十分明らかで、息子の悪行のどれか一つだけをとっても大変説得力があったので、彼自身が司祭達に苦悩と絶望をもってしばしば語ったように、息子の改宗について父親は希望を捨てるしかなかった。われわれの主は、父フランシスコの魂が絶望したままこの世を去ることのないよう、彼の死の目前に王子につかの間の光明をお与えになった。その結果息子は以前のように聴聞しキリシタンとなった。だがぜい弱な基礎しかないために、吐いた物に戻ってしまうことはごくごく自然なことだった⁷。

このような状況下、昨年暴君が博多で棄教令を発すると、ヨシムネはすぐに従って妻と息子を棄教させた。グレゴリオ・セスペデス司祭とクリストバン・モレイラ両司祭が豊後に到着した際には、領内に司祭と修道士が各一人潜伏することについては辛くも承知したが、グレゴリオ司祭ともう一人の修道士はすぐに送り返された。

大阪に暴君を訪ねるにあたり、初めに新国主がしたことは、すべての住民に棄教を申しつけることだった。もとより信仰のない者、デウスについてよく理解しない者たちは命令に従ったが、加えて恐怖心から、外面上はキリシタンと悟らせないようにする者もいた。しかしその他多くの者は命令を気にせず、以前と同じようにキリシタンであることを公言した。

以前われわれはフランシスコによって広大な土地を白杵に与えられ、そこにノヴィシャード⁸と教会⁹を建てたが、火事で燃やされてしまった。嫡子は焼跡地を庶民や職人にあたえて宅地とさせた。

フランシスコはまた津久見の司祭館へも、資金援助のために僅かばかりの禄を与えていた。新国主はこれも取り上げて他の者に与えた。そして司祭たちの機嫌をとる

ために、「禄はいずれ事態が落ち着けば給与しよう。また白杵の土地や府内のコレジオも、いつかは貴会に返還しよう。だがさしあたっては配下の者を置くこととしよう」と言った。

ドン・パウロ¹⁰は先だつての薩摩との戦において国中で最も目立った戦功のあった武将である。多くの敵が彼の手にかかり、また反乱軍の城を12から13も攻略した。新国主は彼がキリシタンとなって以来彼をよく思っておらず、妬みも感じていたが、理性と事実の重みには逆らえず【訳注4】、彼の戦功に報いるために敵方の禄と土地を給与しようと言った。だがドン・パウロはヨシムネの移り気についてよく承知していたので、すぐ手のひらを返されることを憂慮し、「あとで召し上げられるぐらいなら頂きたくありません」と言って受け取りを拒否した。新国主は、他意はないので受け取るようにと言いつ張った。

いよいよ都に出発する時になって、ヨシムネは重臣を2、3人遣わして、棄教しキリシタンであることをやめるようドン・パウロに命じた。ドン・パウロは「これまで何度もお答えしているのでご承知かと思いますが、信仰についてわたくしの考えが今後変わることは一切ございません。職務に関すること・国益となることについては、全力でお仕えいたしますので、どうかわたくしを存分に用いて下さいますよう。ただしわたくしは棄教するような男ではございませんので、本件に関してはどうかもう触れないでいただけますように」と答えた。

自分の歪んだ目論見が通らないことを理解したヨシムネは、重臣たちに「先だつて与えた土地の半分を、自分が発った後にドン・パウロから取り上げるように」と命じた。ドン・パウロは自身の際立った武功について申し立てたが、甲斐なく、所領の半分は理不尽にも召し上げられた。

関白とその弟美濃殿の前でも、新国主はことある毎にドン・パウロをこき下ろし、その行いを非難した。彼の母親が美濃殿によって人質として連れて来られていたので、連れて帰るように関白が言ったところ、「その必要はございません。あの男の服従を確実にするためにも、このまま留めおくのがよいでしょう」と答えた。あろうことかドン・パウロの母親はヨシムネ自身の妹でもあり、最近キリシタンとなっていたことから、その地に拘束しておくことは、大勢の異教徒の敵の中に彼女を放置する

⁷ < Wicki 注 7 > 箴言 26,11「犬が自分の吐いた物に戻って来るように、愚かな者は自分の愚かさを繰り返す」

⁸ < Wicki 注 8 > Cf. Cartas, o.c., 252c

⁹ < Wicki 注 9 > 宮殿の近くにあった(第2巻82章および第3巻14章)

¹⁰ < Wicki 注 10 > 志賀親次(ちかつぐ)。Cartas, 253rに「ドン・パウロ志賀殿、豊後の主なConixu(?)」第4巻19章も参照。

ことになるにも関わらず。

五畿内に滞在中嫡子にはある考えが浮かんだ。それは、暴君に確たる貢献をして、その結果としてさらなる好意や便宜を得ようとの考えから来ていた。そこで部下に次のように言った。「国に帰り次第、領内のキリシタン全員を棄教させること、その際に二度とデウスの教えが領内に広まることのないよう徹底したやり方で棄教させることを、関白さまにお約束しようと思う」と。だが彼が五畿内に伴った部下の中には、デウスの誉れについて熱い思いをもったよきキリシタンが何人かいたので、「関白様はキリシタンについて何も仰っていないのに、かような約束をなさるのはいかながなものでしょう」と理路整然と説いて思いとどまらせた。

嫡子が留守の間、ドン・パウロは職務の必要から、彼の友人でもある暴君の大將たちを肥後に訪ねた。そしてそこから船に乗って、駆け足で、高来にいる副管区長や他の司祭・修道士らのもとを訪れた（副管区長とはこれが初対面だった）。ドン・パウロとの面会は全員を歓喜させたが、彼は一昼夜しかそこに滞在しなかった。豊後に戻ると、嫡子もちょうど都から戻っており、以下のような猜疑心をあらわにした伝言をよこした「その方はいかなる理由で関白様の武將のもとを訪ねたか、さしずめ何かを策謀してのことだろう」。それにたいしてドン・パウロは慎重にまた思慮深く次のように答えた「あちらに参りましたのは職務のため、つまりわたくし自身のお役目と国の利益のためであり、その他の意図はございません」と。

すぐさま嫡子はやって来て、ドン・パウロをさらに問いつめ、面と向かって不信感をぶつけた。彼は初めのうちこそできるだけ丁寧に釈明したが、嫡子が納得しないのであきれ果て、「そのようにお考えなら如何様にもご随意に」と答えると、ヨシムネは言葉を和らげ、機嫌をとるために都からもってきたおみやげを送ってきた。

姫¹¹は火事で燃失したイザベルの祇園神社の再建を命じた。嫡子もまた彼自身の信仰のために、別の偶像崇拜の社寺を国内に建てるように命じた。そして神仏のためにそこで行われる祭式には最大限の贅をつくし、荘厳に行うようにと命じた。

国主が都にいた間、副管区長と何人かの者たちが神の御名のもと話し合っ、後ろ盾を亡くした哀れな豊後のキリシタンを支え教化するために、あと司祭を2人と日本人修道士を1人領内に派遣することが、デウスへの大

きな奉仕になると判断した。そこでフランシスコ・パシオ司祭とゴンサロ・ヘベロ司祭、それにホマンという日本人修道士¹²がドン・パウロの城に遣わされた。彼らは城を拠点としてあちこちのキリシタンを秘密裡に訪ね、住民を鼓舞したり秘蹟をほどこしたりした。

国主が豊後に戻って来ると司祭たちは使いを遣わし、彼の無事の帰還を祝したが、国主は司祭達が領内にいることに全く不満足な様子だった。そこで何人かの身分の高いキリシタンが「今彼らには立ち去る手段がないのですから、次のナウ船がシナから来るまでは留め置いてもよいでしょう」と言うと、やっと納得した。

これがわれわれの主デウスから受けた計り知れない恩恵への、豊後の国主が返した報いの一部です。ですが今後確実に見舞われるであろう多くの逆境の中で、彼がきっと自らに立ち返り、過去の誤りを正す日が来ることを、デウスの善良さにおいて信頼いたします。¹³

第6章

シモ地方でのさらなる労苦と新たな懸念について

このような迫害下、(既に述べてきたように)改宗事業は大変順調にすすんでいた。だがわれわれは再度試練や災厄に突如として見舞われることへの警戒を、少しも怠ることはなかった。なぜならこれまで日本ではキリスト教会のめざましい発展のすぐ後に、悪魔のだまし打ちや反撃に襲われないことはなかったからである。

暴君は都・大阪・堺にある教会や施設を破壊するよう命じた後、長崎のキリシタン集落、さらにその近郊にある浦上の封祿(ドン・プロタジオがキリシタンに与えたもの)も召しあげようとした。ドン・プロタジオの宿敵で異教徒である竜造寺の息子の重臣が、長崎に寄港するシナからのナウ船がもたらす莫大な利益を我がものにしように、この件につき多額の献金を払って関白に依頼したからだ。引き渡しのためにおよそ200人がカミ地方¹からやってきた。彼らはキリシタンを苦しめ、持ってもいない銀を支払わせようとしたので、教会はまたしても彼らのために力を貸した。異教徒が到着した時、われわれの建物は既にもぬけの空で、彼らはこぞって金目のものを探したが、ただ倉庫の入り口に錫めっきをした鉄のかんぬきを見つけただけだった。彼らはそれを銀だと思いこみ引き抜いて金細工職人にもって行ったが、悲しい

¹¹ < Wicki注11 > 正室 (cf. 注2 および6)

¹² < Wicki注12 > 書簡集 (Cartas) 235r には名前 (ホマン) が欠落

¹³ < Wicki注13 > この章の出典は Cartas, 253v-256v (1589年2月24日 G.Coelho 発信)

¹ < Wicki注1 > 都とその近辺のこと

かなただの鉄だった。

関白は5、6人の大将(全員異教徒である)率いる軍勢を肥後に派遣した。検地を実施し、昨年度分の年貢を徴収するためだった。これらの軍勢が哀れなこの国で働いた乱暴狼藉・強盗・残忍行為や侮辱を説明すれば大変長くなる。なぜなら関白の大将たちは住民を従わせ重税を課したが、かの地の住民は貴賤を問わず、全員が昨年の戦により大きな被害をこうむり、家田畑を破壊されていたので、そのような無理強いにこたえる手立てはなかったからである。軍勢はすぐに土地の土豪を4・5人殺し、庶民には昨年分の年貢を支払うよう命じた【訳注5】。もし誰かが「払いたくても払えない」と口答えでもしようものなら、残虐で無慈悲きわまる手段を使って払わせようとし、それでも支払うことができない者の首を切ったり磔にしたりした。

八方ふさがりの苦境の中、哀れな貧しい異教徒たちの中のある者は、親兄弟・親族やわが子の恥辱や死から逃れようと、自らを二束三文で売って支払おうとし、他の者は手をつくして何とか逃げ隠れようとしたが無駄であった。なぜならすぐに捕まって殺され、身ぐるみはがれ、家は強奪された後、息子や妻は捕われの身となったからだ。自らを身売りする者とわが子を売り払う親があまりに大勢いたので、年寄りたちは「かつて日本でこれほどまでの悪逆非道を見たことや聞いたことがあったろうか」と嘆いた。こうして多くの者が束にされて牛よりもずっと安価で売られている。しかしながら肥後の人間は長年、日本にある66カ国の中でも生活習慣の乱れていることにかけては1番であったから、これよりもっと厳しく残酷な罰に値したとも言える。

大将たちは暴君からいくつか指令を受けて来ていたが、その内の一つはドン・ジョアン・天草殿の首を落とすことだった。天草殿はキリシタンたちから事前に知らせを得て、どんなに要請されたり危険はないと保障されても自領から出ないように忠告されていた。実際彼らは様々な策を弄して殿を誘い出そうとしたが、警戒している天草殿を屋外に連れ出して討ち殺すことはできなかった。しかし殿の領地は肥後にあったため、そこに上地方の者が行って検地をすることには承諾せざるをえなかった。天草殿は貧しかったので、それによって殿も家来も破滅させられることとなった。折り合いをつけるため300クルザードの支払いと、関白への釈明が命じられたが、殿にはそのような法外な支払いをする手段はなかつ

たので、できる限りのことをして許しを願った【訳注6】。

イエズス会の人間は、ドン・ジョアンのこの差し迫った危機を目の当たりにして、全員が哀れみ悲嘆にくれた。彼の人間性(よきキリシタンで、シモ地方におけるキリスト教会の屋台骨の一人であった)のためであり、また彼の家来がみなキリシタンで、領内には教会も多数置かれ司祭・修道士たちが配置されていたためでもあった。彼はまだこの窮地を脱していない。

この第2の逆境と苦悩に次いで、すぐまた別の苦境が襲ったが、これは有馬殿の領地である高来のイエズス会全体に、最も強烈な打撃を与えるものだった。前にも述べたように²、ドン・プロタジオは領内の主要な土地—三会と島原—を奪還し、さらに神代の城を獲得して、宿敵政家³の侵入を阻止していた。政家は、6年ほど前に島原で殺された肥前国主龍造寺⁴の息子である。ドン・プロタジオは新たに獲得した土地の支配を確立するために住人たちを少しずつキリシタンに改宗させていた。

だが敵方も安穏とはしておらず、五畿内に行って多額の献金を支払い、暴君に働きかけて、三会・島原の土地の半分と、神代の城と封禄全部を奪い取ろうと画策した。首尾よく許可状を得ると、意気揚々と肥後に来て、暴君の大将たちが土地と収入を彼らのものとしてくれるのを待った。これには3つの非常に深刻な害がともなった。一つは高来のキリスト教会の消失である。高来のキリシタンコミュニティは人数も多く安定していたが、一旦敵の手に落ちればすぐ破滅することが予想された【訳注7】。二つはこれによって、ドン・プロタジオを遠からず死に追いやり、現在彼が知行する土地を乗っ取る絶好の機会を敵に与えてしまうことだった。三つには、このことでカミ地方の人間がわれわれと接触し、われわれを強奪したり殺害したりする機会も与えてしまうことだった。彼らは強欲さからそのことを切望しているのだった。

なによりも高来の人間を弱気にさせたのは、ちょうどこの時ドン・プロタジオが、暴君の命令で、部下とともに城普請のため肥後に留まっていることだった。敵対者の存在、また暴君の指示に反してイエズス会を領内に抱えているという事実を考えると、有馬殿はあちらで捕まって殺されるのではないか、さらに有馬城も(これまで他の領主たちが同じ目にあったように)敵に乗っ取られてしまうのではないかと住民たちは噂しあった。

このような騒ぎの中、高来の人間はみな動揺し不安に

² < Wicki注2 > cf. 第1章5r

³ < Wicki注3 > 龍造寺政家

⁴ < Wicki注4 > 龍造寺隆信(～1585) cf. 第4巻9章

駆られ、各々の所持品を隠そうと必死だった。この試練によって誰よりも打撃を受けるのはイエズス会だったので、幾度もの協議の末、今回の追放に際して最も安全だろうとの理由から地域内の全財産を集めていた有馬から、土地の有力者で信頼のおける者たちのところに、緊急に物資が再度振り分けられることとなった。一部は高みにある城に隠され、一部は船で平戸まで密かに運ばれた。できる限り事を荒立てずさりげなく輸送するために、夜間に全てを終わらせる必要があった。各施設の祭服や財産を隠すのは、人手不足から大変な作業だったが、食料を忍ばせて救出するのはそれとは比較にならないほどの困難だった。会の関係者全てを養うために1000を超える米俵【訳注8】があったからである。

時をおかず有馬の施設から一切合財が運び出された。シモ地方の上級司祭バルキオール・デ・モウラは同僚たちと一緒に、とある山中のキリシタンの住居に身を潜めた。

口之津・長崎の教会や施設も空にして閉鎖された。警備に残された者たちは、カミ地方から兵士たちが来た時すぐに姿を消すことができるよう、近くの森に逃げ道を作った。修道士が外出したり、司祭達が告解や授洗に出かけたりする際には、坊主・侍・商人や医者などに扮装して出かけた。

既に述べたように⁵、修練院は、多くの貴族や地位の高い者が住んでいる有馬から1レグア離れた有家に置かれた【訳注9】。有家のキリシタンはわれわれのことを大変よく理解してまるで身内のような感覚だった。彼らの間では、デウスの言葉はさながら肥沃な土に蒔かれる種のような感覚であったが、加えてジョアン・左兵衛殿⁶とその妻ジェロニマの徳・熱意・献身のすばらしい模範を間近に見られるのは、彼らにとって大きな救いであった。ジョアン・左兵衛殿は有馬殿の叔父でかの地で代官をつとめる男である。ジョアン殿も妻も、かの地でキリスト教への改宗が始まって以来の会の功労者で、修練院も彼らの保護と助力のもとに有家に置かれていた。2人がどれだけわれわれ一人一人に愛情をもち、慈悲と行いをもって接したかを詳しくここで語るのは冗漫に過ぎよう。

今年は聖週間⁷の祭りが催されたが、この祝いが当地で開催されたのは初めてだったので、全ての者が大変慰

められた。とりわけ彼らにとって有益かつ驚きであったのは、この四旬節に何人かのヨーロッパ人司祭と修道士が、日本語で巧みに説教をしたことだった。彼らの受難の説教を聞いて日本人たちは涙を流し信仰を強めた。

しかしながらカミ地方からの軍が侵入すれば、高来の修練院は危険となる。そのため話し合いによって、聖体祭⁸の少し前までに、修練院を天草に移転することを決めた。ジェロニマやその他の敬虔なキリシタンがこの別離と移転について流したたくさんの涙と引き換えに、ドン・ジョアンとその親戚・部下たちは大変喜んだ。

昨年改宗した者たちの中に、大矢野⁹の島々の島民がいる。彼らの改宗はわれわれ全員にとって非常に大きな慰めとなった。なぜならそれはまったくデウスのご意思であったと思われるからだ。次にあげるのはかの地からイタリア人司祭グレゴリオ・フルビオが書いてよこした手紙である。【訳注10】

「本山地方¹⁰の田舎を15日間ほど、修道士1人を伴って歩きました。その際に新しくキリシタンとなった住民から主において受けた慰めは、言葉で言い尽くすことができません。とりわけわれわれが各村に2日ずつ滞在したのは、今回が初めてのことでしたから、その喜びはなおのことです【訳注11】。初日の晩は集まったキリシタンを前に修道士が説教をしましたが、その後に住民は貧しい生活の中から何がしかを持ちよってわれわれをもてなしてくれました。翌朝にミサを終えるとまた説教をしました。その晩修道士はもっと小さな村々(ミサにも宿泊にも適した設備がない村々)に説教に行き、わたしは主要な村に留まりました。そこに老若男女の住民が、風雨も寒さも気にせず、夜間に遠方から集まってきてくれました。修道士がおらず言葉が不自由でしたが、わたしは日本語の「どちな きりしたん」を手に読み聞かせ、クルス(十字架)の意味を教えました。またパアテル・ノステルの祈りやクレド、十の戒め、デウスの御おきてとは何か、その他心に浮かんだことを説いて聞かせました。そうすると彼らは説教よりもこちらの方が面白いと言いました。

幾度も彼らに「もう充分でしょう、お帰りなさい」と言いましたが、効果はなく、続きを読んでほしいと懇願されましたので、わたしは夜中まで彼らと過ごすことに

⁵ < Wicki注5 > cf. 第1章3r

⁶ < Wicki注6 > cf. 第3巻19章(1576年、30名の貴人がキリシタンとなった時)

⁷ < Wicki注7 > 1588年4月10日～17日

⁸ < Wicki注8 > 夜通し祝われるこの祭りは、当時6月23日に行われていた。

⁹ < Wicki注9 > 大矢野 cf. 第4巻63章

¹⁰ < Wicki注10 > 上に同じ。

なりました。その後にオラシヨ(祈祷)や連禱も共に唱えました。帰る時には子どもたちが(つい数日前まで石像や木像の形をとった悪魔を崇拜していたにも関わらず)詩編や祈祷を大変喜んで歌いながら戻って行きました。年寄りもそれ以外の者も、祈祷を非常によく覚えているのに感嘆させられます。わたしが数珠(ロザリオ)をもって行ったところ、十分数に余裕があると見込んでいたにも関わらず、彼らに頼みこまれ、女性用に持参した大口ザリオ¹¹を3つに分け、一つ一つに錫の十字架をつけて男たちにも配らなければなりませんでした。それでも欲する者全員を満足させることはできなかったのです。

非常に高齢の夫婦が、多くのキリシタンの前で、自分たちも祈祷を覚えたいと言い出しました。それだけでなく他の者たちと同じように習得できたのを見て大変心が慰められました。その際に健全な自負心と素直さから、夫は自分と同じくらい老いた妻の手の指をとってどのように十字を切るかを教えたのでした。

いくつかの地方では子どもたちは祈祷をとてもよく覚え、「主を讃えよ」¹²を大変愛らしく歌いますが、その様子は長崎のキリシタンにも負けないほどです。このような状態ですから、道を歩けばそこここで、パアテル・ノステルやアヴェマリア、クレドを誰かが口ずさんでいるのに行きあいます。近隣の村々ではほとんどデウスへの賛美以外は聞かれないほどでした。

全ての者が自宅に紙に描いたクルスを所有していることも分かりました。それは彼らが自分たちの工夫により手に入れたものです。

住民たちが大変善良で素朴であることに深い慰めを得ています。わたしたちは彼らにロザリオを与える前に、オラシヨを覚えているかどうかを見るために、他のキリシタンの前で「パアテル・ノステル」と「アヴェマリア」を祈らせるのですが、そのことが他の者たちにも祈りを覚える意欲を生んでいます。そうして彼らはまず十字架を訪ねるのです。

すでにたくさんの住民に洗礼を授けました。ですが洗礼式の時に島におらず、まだ受洗していない者もいます。わたしたちはいくつかの十字架も建てました。どうか主がわたしたち全ての者にお恵みと愛をお与えくださいますよう。アーメン。

1588年1月24日大矢野にて¹³

【訳注1】*E estando a fortaleza longe, alta e apartada do fogo, cercada de mar, pelos ares (fora de tudo o que se podia imaginar) saltou lá o fogo dentro...*

松田訳は「鳥たちによって火が(城)内に投げこまれる」pelos aresをpelos avesと読んでいるか。

【訳注2】*...e assim nas terras de Mie e Ximabara se achão às vezes quarenta juntos para vender, ...*

本稿の訳はMarco Fontanella氏、Edmir Missio氏の教示による。

<松田訳>「時に四十名(もの)売り手が集まる(有様で)」。

【訳注3】*Assim como parece não se fazer injuria tratar da bondade e virtude dos servos de Deos, pois ficão seos louvores rezultando em maior gloria do mesmo Senhor, summo autor de todo bem; assim tratando da insolencia, ingratitude e malicia dos maos, parece se lhe não faz affronta...*

<松田訳>「デウスの僕たちの優れた人格と徳操について述べるのは、彼らへの讃辞があらゆる善の源であるデウス御自身のより大いなる栄光となることであるから、彼らを辱めたことにならぬ(のはいうまでもない)。同様に、悪人の傲慢、忘恩、悪意について述べる時にも、それは彼らを侮辱した行為ではないように思われる」

ポルトガル語では...parece se lhe não faz affronta...と目的語(間接目的格人称代名詞)が単数(lhe)になっており、文法的に見れば辱められるのは「主」だと考えられる。

【訳注4】*...posto que o Príncipe sempre lhe teve enveja e má vontade, depois que se fez christão, todavia compelido da efficacia da rezão e verdade, lhe deo em satisfação de seos serviços...*

<松田訳>「嫡子は常日頃、彼に対して嫉妬と悪意を抱いていたが、(自分が)キリシタンとなつてからは、道理と真理の力に押され...」。どちらの解釈も可能か。

¹¹< Wicki注11> 150個のアヴェ・マリアよりなる大きなロザリオのこと。50個ずつの珠よりなる3つの小ロザリオに分割可能。この小さいロザリオが今日一般的なロザリオで、テルソ(3分の1という意味)、コンタス、ロザリオ等と呼ばれる。

¹²< Wicki注12> 詩編116,1

¹³< Wicki注13> この書簡は、STREITにもSHÜTTE(Introductio)にも記録されていない。

【訳注5】*Os quaes logo matarão a quatro ou cinco senhores dos principaes do reyno, e obrigando a toda a gente popular que pagassem a novidade do anno passado...*

<松田訳>では脱落。

【訳注6】*...mas porque com isto ficava destruido elle e seos vassalos, estando Dom João bem necessitado, por conserto lhe fizerão pagar trezento [s] cruzados, obrigando-o que fosse dar rezão de sy a Quambacu. Elle se escuzou o melhor que pode por não ter possibilidade para fazer tão extraordinarios gastos*

<松田訳> 「だがこれによって、ドン・ジョアンと彼の家臣たちは破滅させられる（危険に陥り）、彼は援助を必要とする（貧しい）身であるにもかかわらず、協定に基づいて彼に三百クルザードを支払わせ、（その上）関白のもとに赴いて己について報告するようにと命じた。彼はそのような特別な出費をするだけの能力がないと言って、之を体よく断った。」

【訳注7】*O 1º, era perder-se a christandade do Tacacu, que hé couza mui grande e está bem fundada, mas evidentemente, metida nas mãos dos inimigos, era logo destruida.. (49)*

<松田訳> 「第一は、高来のキリシタン宗団の喪失である。それはきわめて重大なことで十分に根拠のあることであった。しかも、もし指摘の掌中に陥るならば、それが破滅させられるのはあまりにも明白であった」。<松田訳>ではqueを前文の内容を受けると解し、そのためにmas（しかし）を「しかも」と訳している。

【訳注8】*...mais de mil e tantos fardos de arroz*

<松田訳> 「千数百俵以上の米」

【訳注9】*A caza de aprovação, como fica dito, se tinha posta em Arie, que dista de Arima huma legoa, aonde morão muitos fidalgos e gente honrada.*

<松田訳> 「修練院は既述のように有馬から一里隔たった有家に設けられていた。そこには大勢貴人や地位の高い人たちが住んでいる。」

どちらの解釈も可能。

【訳注10】

<松田訳>ではこのすぐ後に、「グレゴリオ・フルヴァイオ師が大矢野島から送って来た書簡の写し」とあるが、

Wicki氏によればこの記述は後世の写本作成者の挿入。

【訳注11】*...não poderia declarar a consolação que no Senhor recebi com aquelles novos christãos, e maiormente por ser a primeira vez que detinhamo-nos (!) dous dias em cada inaca.*

<松田訳> 「その大半（の場所）は初めての訪問でしたから、田舎ごとに二日滞在しました」